

男女対抗、去勢地下闘技場

素人男が借金のかたに
格闘技有段者女性と
金的ありの地下格闘！



玉子王子 著

1章 ナノテクで治るから、キ〇タマ潰れても平気！ って、他人事だと思いやがって……

狭い部屋。

イメージ的に、テレビ局のタレント控え室のような感じ。

しかし、窓はない。

地下の一室なのだ。

そう考えただけで、小野渕は息苦しさを感ずる。

Tシャツで下は海パンのようなブーメランパンツの三〇ほどの男。

その前にぐんと若い女。

「大丈夫、小野渕さんの方が強いですよ」

赤いミディアムボブの髪型の若い女。

十代といわれても驚かないが、働いているので一様成人しているのだろう。

千田千秋という妙な名前。

「相手は所詮女ですからね、力じゃ男の人には絶対勝てませんよ」

「そういってもらえると勝てそうな気がする」

人のいうことを信じやすい男だった。

学生時代、保険証を同級生に貸したらそれでサラ金から借金して逃げられ、小野渕が返すハメになった。

その同級生が半年ほど前親から引き継いだ彼の会社にやってきて保証人になって欲しいと頼んできた。

金を返す予定はあるというのだ。

彼の話は、単純だった。

消費増税対策に国際的な大企業が金をプールしているのだが、それをただ放置しておくのは惜しい。しかしリスクがある所に貸すわけにも行かない。

そこで信用できる相手に低金利で貸す事になった、という。

同級生が借りる予定なのは五百億で、元手があれば確実に儲かる商売があるというのだ。

が、その五百億を借りるのに必要な保証金千万がない。

それを出してもらえれば、五百億円借りた時点で一億円にして返す。

前に借金させてしまったことのお詫びだどという。

大金を見せ金にして、それを動かす「ちょっとのお金」を引っ張って逃げる。

根っからの M 資金型詐欺だが、あっさり小野渕は信じて会社の運転資金を貸した。

もちろん、同級生はそのまま消えた。

仕方なく借金で会社の運転資金を賄うが、返しきれず、サラ金に借りて返し、次は闇金に、と転落コース。

どうしようもない、という所に、やってきたのが千秋だった。

「いい儲け口があるんです。借金はとりあえず肩代わりしますから、ちょっとしたショーに出てもらえませんか？」

普通はあまりにも怪しすぎる。

いくら首が回らないとはいえ、元々傾きかけの中小企業などなんとしてでも守る必要などないだろう。

だが、小野渕はあっさり受けた。

元々、信じやすい男だったから。

契約書にサインをしてから、千秋は説明を始めた。

彼女が言う「イベント」は、地下闘技場で戦うという夢というより寝言のような話だった。

「えー、試合直前ですが、最後にもう一度説明しますね」

「もう聞いているからいいけどね」

「念のためですよ」

いいつつ、小冊子を取り出す。

「えー、それじゃ、まずですね、小野渕さんが今日やる試合は、ノーマルバトルという普通の奴です。何度も戦えば、別のタイプの試合に出る資格ももらえます。そっちの方が割がいい場合もあるので…まあ、それはまた権利が出来てから話しますね。私がマネージャーとして、損しないようにサポートさせていただきますから」

「助かります」

「え？ あ、どうも」

——いやいや、私は組織に雇われた人間で、別に本当にあなたに得させるためってわけじゃ……まあ、組織の利害と対立しない範囲では出来るだけそりゃやるけど。本当に信じやすい人ね。

「えー、ノーマルバトルは十ラウンド制。一ラウンド三分で、インターバルが三分。都合一時間ですね」

「えー、それで、完全ノックアウト制と」

「そう。完全に気絶するか、十ラウンド戦い抜いて判定かどちらかです」

扉がノックされる。

「前の試合が早く終わったので、ちょっと繰上げで」

「あ！ わかりました！ もう説明する時間なくなりました、一樣最後に言うておきますけど、逃げ出そうとしないで下さいね？ その場合興行を壊したとしてペナルティーの特別試合を科せられますから。それじゃ……と、その前に、この薬飲んでください」

渡されて、すぐに飲む小野渕。

——危ないなこの人……

何の薬かも聞かないなど。

「えーっと、今の薬は勇気が出る薬……みたいなもんで」

「え？ 興奮剤とか？」

「いや、そういうことじゃなくて……体ですね。その、男の人って怖いときとか、大事な所が縮んだりするでしょ？ それってちょっとみともないとか……だからそこを緩める薬。本来ならそこを手術するときに萎縮しないように飲む奴なんですけど……」

ちょっと、というかかなり恥ずかしそうにいう千秋。

「玉が縮まないように……って、ちょっと待ってください」

「あ、基本、大丈夫ですよ？ パンツ履いて戦うんですから。でも、破れることもありますから」

「パンツ破れても試合中断無しですか？」

「はい。中断はかなり重大な怪我を負った場合だけです。それでもナノ薬で知慮して、インターバル三分の後また試合続行ですが」

「厳しいですね」

「だから、ファイトマネーがいいんです」

一試合百万。

勝てばそれに加えて三百万。

さらに、男だけの特別ボーナスもある。

特定の条件をクリアしたら……というより「してしまったら」一ラウンドごとに十万、もしくは五十万のボーナス。コンプリートだと五百万という事になる。

椅子から立ち上がり、扉に向かう二人。

「コンプリートすれば六百万ですよ。二試合で借金チャラです」

「コンプリートはしたくないな……」

「ええ？ いいじゃないですか、うちで使ってる治療薬は

軍用の新型だから、二十秒で治りますよ」

ムニユ、とブーメランパンツというか、
試合用のパンツの前の膨らみを揉む千秋。

「キ〇タマが潰れても」

「な……ちよつ」

「うふ、結構ボリュームあるじゃないですか。

これ以上揉むと入らなくなりそう。

あ、パンツにとって事ですよ？」

腰を引く小野渚から、笑って手を引く千秋。

——でも、マジ話……コンプリート、

玉二十個粉碎

もありうる相手なのよね。

それは流石に
口に来なかった。

「コンプリートはしたくないな……」

「ええ？ いいじゃないですか、うちで使ってる治療薬は軍用の新型だから、二十秒で治りますよ」

ムニュ、とブーメランパンツというか、試合用のパンツの前の膨らみを揉む千秋。

「キ〇タマが潰れても」

「な……ちょっ」

「うふ、結構ボリュームあるじゃないですか。これ以上揉むと入らなくなりそう。あ、パンツにとって事ですよ？」

腰を引く小野渕から、笑って手を引く千秋。

——でも、マジ話……コンプリート、玉二十個**粉碎**もありうる相手なのよね。

それは流石に口に出来なかった。

相手は、北山高菜という空手使いの娘。

うさぎ〇子高の空手部主将、つまり未成年。

それに男女対抗地下格闘などやらせていい訳がない。

だがそこは、一様許可を取っているとはいえ非合法ギリギリの所でやっている地下闘技場である、成人です、と、いって、動画配信やDVD販売時は顔を変えてばれないように誤魔化すことで適当に乗り切っている。

——あの子みたいに強く見た目もよく、しかも男と戦うのにまったく物怖じしないどころかキ〇タマを嬉々として粉碎しに行く選手は貴重なのよね。



男は借金のカタに引っ張ってくるが、相手をする女性選手はなかなかそうも行かない。

しっかり格闘技をやっている人間で借金まみれでしかもそこそこ見栄えもいい女など条件が厳しすぎる。

——まあ、あまり見栄えや技量で贅沢を言わなければこのうさぎ県にはそういう女はなぜか結構いるけど……

女性のDS率世界一、とどういう方法で統計を取ったのかわからない噂がまことしやかに囁かれているうさぎ県である。

ともかく、高菜。

空手の腕は三段相当、肉玉を潰すのは平気所か率先して潰したがる。

三十戦三十勝、というのは当然だ。

男子は体格と力で女に勝っているだけの格闘技未経験のボンクラで、女子は格闘技経験者というのがこの地下闘技場のマッチメイクである。それで男の急所への攻撃がありなのだから男が勝つわけがない。

高菜の戦績で目立つのは勝率ではない。

——あの子のコンプリート回数は、二五回という異常な数なのよね。どんだけキ〇タマ潰したいのって感じ。残りの五回も、十個以上は潰してるし。

女子もコンプリートを達成すれば五百万もらえる。

が、高菜はどう考えても金のためにやってなどいない。

控え室に金を忘れて帰ることがたびたびあるというのだから、本当に潰したくて潰しているとしか考えられない。

後ろをついてくる小野渕を意識する。

振り返りはしないが、足音を聞く。

——この人もキ〇タマのべ二十個潰されて、二度と試合に出なくなっちゃうかな……高菜の試合は盛り上がるけど、発展性がない気がするわね。

いくら玉を潰されても秒単位で元に戻るとはいえ、潰された痛みや屈辱はなくなるらないのだ。

大体、三分のインターバルでは潰された痛みが治まる前に次の試合に出される。

また次のラウンドで潰されれば痛みが重なっていくだろう。

女の千秋にははっきりとはわからないが、相当なことだろうと他人事のように想像できる。

闘技場左右にある選手の準備室に入る。

「お疲れ様です」

スタッフが頭を下げてくる。

女だ。

先ほど呼びに来たのも、他の職員も、地下闘技場で働くのは全員女性ばかり。

さらにいえば、闘技場の客席にいるのも女性客だけだ。

それは、配信される「試合の様子」は観客の姿も入っているためだ。

闘技場を映すいくつものカメラの映像は準備室のテレビにも配信されていた。

闘技場は円形で、二重構造。

中の円の外に客席がある形だ。客席と砂敷きの戦場の間には、木の壁があるだけだ。それはもちろん客席から中が見える高さ。

客席は何段かになっていて外側の客も内側が当然見える形だ。

るだが、小野渚は疑わない。

と、かなり広い円形闘技場、その砂のリングの向こう側の門が開くと、赤いビキニの女が出てくる。



「赤コーナー！ 古流空手からの刺客！ その流派は内弟子に豚のキ〇タマを潰させる秘密の訓練を課す！ 子供の頃からキ〇タマを潰し続けてきた金責めモンスター！ 三十戦三十勝無敗！ コンプリート回数驚異の二五回の去勢姫！ 南穴あああああああああ！ 高菜あああああああああ！」

いい加減な偽名で呼ばれつつ、入場する北山高菜。

「あれ？ あの子、〇子高生ぐらいじゃないか？」

二〇ですよ、と誰かに言われれば信じるだろうが、そういう誘導がないなら案外正しい判断力を持っている小野渚だった。

中央にレフェリーの女性。

バンニーガールの格好の、薄い色の金髪。

その前に向かい合って並ぶ小野渚と高菜。

「どうも、結構体格いいかたですね」

高菜。

女としてはかなり背の高いほうで、小野渚より少し小さい程度だ。

胸はかなり大きく、グラマーなタイプのモデルのような体型だろう。

それを見て、強そうとはあまり思えないが、小野渕は警戒していた。

その理由は、先ほどバニーのレフェリーが叫んだ紹介の口上だ。

——子供のときから豚のキ〇タマ潰して訓練してきただって？ 無茶苦茶じゃねえか。

普通信じない話である。

が、事実だった。

普通なら嘘だと思って、その事実に対して警戒しないだろう。

だが、小野渕はあっさり信じて、本来より急所攻撃を警戒する。

信じやすい性質もたまには役に立つのかもしれない。

「眼突きは無し、髪の毛を引っ張るのも無し」

その他、細かいルールを説明するが、大体において普通の総合格闘技のルールと大して変わらない。

ただ、金的ありというだけだ。

「それでは、試合開始！」

と、腰を落とした構えを取る高菜。

動かない。

それに、ボクシングのような半端な構えを取り、歩いて近付く素人小野渕。

まだ相手の攻撃はまったく届かない。

そう思いながら、さらに一步踏み込む。

パン。

軽い音。

高菜の爪先が一瞬グニュッと、小野渕の男の肉玉を持ち上げ、すぐに下がる。

小野渕の血の気が引く。

冗談だろう、まだ当たるはずがない。

そんなことを一瞬で考えるが、すぐに上ってくる激痛ですべての考えが消える。

「おぐうあああっ！ キ〇タマあああああああっ！」

押し潰すつもりならまだしも、軽く打ってダメージを与えるなら、当ててすぐ離れた方がいい。

潰す気がない軽い蹴りとしては、最大級のダメージを与える模範的な金的蹴りを放った高菜。

股間を押さえ、砂の上に転がる小野渕。

「おーっと！ いきなり高菜の金的蹴り炸裂！ 大事な男の金のタマタマに華奢な女の子の足の甲が直撃です！ これは痛い！」

「おぐううう」

呻き、汗を噴出させて転がる小野渕。腹が引き締め、内臓が捻れる。

——こ、これがプロのキ〇タマ蹴り……し、死ぬ……

と、顔に影がさす。

高菜が見下ろしてきていた。下乳が揺れるのを、あまりの肉玉の痛みで性的な関心を一時完全に失った小野渕はただ見上げる。

「ふふ、だらしがないな。大の男が、キ〇タマ蹴られたぐらいで」

「な、何を……あ」

肩を押すようにして小野渚を転がし、仰向けにさせる。

「あ、ちょ、ちょっと……レフェリー！」

「何ですか？」

「こ、この子が倒れてる俺に攻撃を……」

「総合ルールで、完全気絶か十ラウンド終了で終わりのルールですから、倒れていても攻撃されますよ。普通の総合なら倒れて戦意がなければ負けでしょうけど」

「な、あっ」

腹の上に座られる。背中を向けて。

腹の上に座られる。背中を向けて。

「ふふふ、総合名物……」

手を握り、振り上げる高菜。



「キ○タマパウンドだ！」
「おごおおおおおおおっ！」

ゴチャ、ゴチャ、と一発一発強く肉玉に華奢な拳の側面を叩き込む。鉄槌という打ち方、肩を叩くような形だ。一打ちごとに肉玉がひしゃげ、小野渚が男にしかわからない激痛で目を剥く。

「ふふふ、総合名物……」

手を握り、振り上げる高菜。

「キ○タマパウンドだ！ 潰れる！ キ○タマ潰れる！ ははははは！ キ○タマキ○タマ！」

もちろん、それが許される試合は「総合」とは呼ばれないだろう。

「おごおおおおおおおっ！」

ゴチャ、ゴチャ、と一発一発強く肉玉に華奢な拳の側面を叩き込む。鉄槌という打ち方、肩を叩く

ような形だ。

一打ちごとに肉玉がひしゃげ、小野渕が男にしかわからない激痛で目を剥く。

普通なら、小野渕の顔は背中側とはいえ座っている腹筋の締まりで尋常ではない痛みを受けていることはわかるだろう。

普通の女性なら多少は肉玉鉄槌打ちを遠慮するはずだ。

が、唾を飛ばし、目を輝かせて打ち続ける高菜。

「そらそらそらそら！ 今日もコンプリート目指すぞ！ あんたもその方が助かるだろ！？ だからキ〇タマ潰す！ 左右のキ〇タマ二個とも潰す！ 十回ずつ！」

「や、やめ……やめてくれえええええええええっ！」

ボスボスボスボス、と情け容赦ない鉄槌が、高菜に足を絡めて開かされた小野渕の股間に叩き込まれる。

普通なら玉も竿も始めの金蹴りで縮み上がっているはずだが、試合前に飲んだ薬のせいで緩々の普段の状態だ。

「あははは！ この試合で叩くキ〇タマはグニュグニュしてて実にいい！」

「うぎゃあああああああああああああああつ！ キ〇タマがあああああああああ！」

腰を跳ね上げる小野渕。

磨り潰すように叩かれながらも、薬の力で弛んでいる肉玉もパンツの下でブルンと震動する。

震動して、位置が変わる。

上のほうに来た所に、鉄槌が振ってくる。

右玉が竿の根元の横でグチ、と腰骨と鉄槌の間にちょうど挟まる。

「あぎゃあああああああああああああああああああああつ！」

白目を剥き、泡を吹く小野渕。

「あはははは！ キ〇タマ潰れた！ 右玉だ！」

「早くも睾丸一つ破裂です！ さすが高菜！ キ〇タマ潰しはお手の物！」

「はははは！ ほらほら、左も潰れろ！ 潰れろ！」

「ぎゃっ！ やめ……やめ……はぐっ！ おごおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

左を潰すと決めて集中攻撃した高菜。

袋の外側にこすり付けるように打って逃げ場をなくす。それも両手で。

それではあつという間に残りの玉も磨り潰されて当然だろう。

白目を剥き、完全に意識を失う小野渕。

それで完全気絶……とはみなされない。

「早くも去勢です！ 開始から約一分！ さすが高菜選手！」

「やったわ！」

「さすが高菜ちゃん！ 速攻キ〇タマ潰し！」

「力が強いだけで勝てるつもりの男なんてこんなもんよ！ キ〇タマ蹴られた時点で終わってたわね！」

「チンチ〇ついてるだけで勝てる世界じゃないのよ、ミックスファイトはね！ よくやったわ高菜ちゃん！」

観客が口々に高菜を賞賛する。

手を上げ、歓声に応える高菜。

客も、彼女も、同じドS女性同士だ、心が通じ合う。

選手は商売であり、全員ドSというわけでもない。

しかし客はわざわざこういう試合を見に地下闘技場に来るだけに、ドSばかりである。

そんな客たちにとって、趣味が合う選手は貴重だ。

実力もあいまって、高菜が最近人気急上昇中なのは当然だろう。

歓声の中、小野渕が目覚ます。

ナノ薬で肉玉が一瞬で再生され、頬を叩かれて意識を取り戻した。

「まだ小野渕選手、意識があります！ さすが男性！ 頑丈です！」

「いや、ちょ……もうやめたいかな」

「大丈夫！」

座り、股間を押さえたままの小野渕の背を叩くバニーレフェリー。

「まだまだ全然動けますよ！ 力なら勝ってるんだから、逆転余裕！ 大体いいんですか？ 女に睾丸潰されたまま負けても。男として。それは再生可能なキ〇タマが潰れるよりよっぽど何かを失う事になるんじゃない？」

「そういわれてみれば……」

「はい！ まだまだ闘志を燃やしている小野渕選手！ しかし睾丸二個破裂です！ 規定により、このラウンドは終了！ 三分のインターバルの後、第二ラウンドとなります！」

二人のやり取りを聞いて、高菜がほくそえむ。

——やる気があるのか。ならまだまだ楽しめそうだな。

ペロ、と唇を舐める。

ビキニのパンツの食い込みを直す振りをして、前を軽く触れる。

パンツの布がいいのでわからないが、彼女の雌穴はじつとりと濡れ始めていた。

——やっぱりキ〇タマ潰しが一番興奮するな。それに勝るのは、玉潰された男が勃起してて、それを使っていいって状況だけだ。

高菜はそういう去勢逆レイプが大好きなドS少女なのだった。

外の世界では相当な変わり者である。

が、この金責めミックスファイトという特別な場では誰よりも輝く。

体験版終わり

この後、高菜による去勢がしつこく続き、

ついに小野渕は逃げ出してしまいます

しかし観客の女性たちに阻まれ、キ〇タマ責めで押さえ込まれ、

逃走へのペナルティーとしての特別試合という名目で

寄ってたかって玉を潰される去勢リンチ展開

続きは製品版でお楽しみください